

# Japan National Young Water Professionals Newsletter

第4号

発行日 2012年5月22日

## 【特集】 第46回日本水環境学会年会の参加報告

岩崎雄一（東京工業大学大学院理工学研究科  
日本学術振興会特別研究員）



2012年3月14日(ホワイトデー！)～16日にかけて、東洋大学白山第2キャンパスにおいて、第46回日本水環境学会年会が開催されました。都内開催のため、個人的には近くとても便利だったのですが、学会特有の「遠出感」がなくて少し残念に思ったりしました。より詳しい情報は水環境学会誌の年会報告をご覧くださいと思います。

さて、水環境学会には今回の年会で4回目の参加となります。私自身は「異なる亜鉛濃度を示す河川中下流地点間での底生動物群集の比較」というタイトルで、ポスター発表をさせて頂きました。化学物質の野外での生態影響評価という分野はどこの学会に行っても「王道」ではないため、学会発表にあまり良い印象はないのですが、今回は「若手の会」で発表させて頂いたおかげか、いつもより盛況で充実していたように思います(この場を借りて、関係者の皆様に感謝申し上げます)。

また、個人的な趣向による紹介となってしまうのですが、マイクロゾムを用いて化学物質が生態系機能に及ぼす影響を評価した研究に興味深かったです(福島大学の研究グループによる)。生物多様性と生態系機能(あるいは、生態系サービス)との関係は生態学においてホットなテーマの1つですが、その明確

な関係に決着はついていません。そのため、生物群集の特性として生態影響評価に一般的に用いられている種数や個体数だけではなく、生態系機能(上記研究では、「生産量と呼吸量の比」)への影響を評価することも重要だと考えられます。生態系機能が保全対象となった場合に、どのレベルを保全目標とするかは難しい問題かもしれませんが、生物多様性と生態系機能の関係の評価という意味でも、魅力的な研究分野だと感じました。

最後に、私は、学会で学んだことや思いついた研究のアイデア等を直後にまとめておくようにしています。将来具体的に役に立つかはわかりませんが、自分の頭を整理する良い機会になると思いますし、お勧めです(<http://goo.gl/tgrUw>)。



写真1: ポスター発表

## 吉田 征史(Japan-YWP AP-YWP実行委員 日本大学理工学部)



私は日本水環境学会関東支部幹事として、年会実行委員会に参画したので、今回は「参加報告」というよりも「裏方での作業報告？」をさせていただきます。

水環境学会には7つの支部があり、毎年、年会場を順番に担当しております。今回は関東支部の担当であったため、2010年5月頃から関東支部幹事会において会場の選定が始まり、12月頃からコア委員会の設立に向けて議論が成されました。2011年4月～5月にコア委員会を中心に実行委員会の設立が検討され、6月から本格的に実行委員会の活動が始まりました。これ以降は各担当ごとに作業を進めながら、およそ2ヶ月に1回程度の頻度で実行委員会が開催されました。

私の担当は広報部会で、主に学会誌の会告を毎月更新したり、学会HP記載事項に関して作成しました。その他、プログラム編成のお手伝いもしましたが、口頭発表で500件以上、ポスターも併せると約700件であったため、かなりの時間を要しました。

当日の私はというと、受付担当がほとんどであったため、なかなか会議には参加できず、会場担当で

あったセッションと自分が座長のセッションにしか参加できなかったのは少し残念でしたが、実行委員会の皆様と和気藹々と作業できたのはとても良い経験となりました。

次回は関西支部(大阪工業大学大宮キャンパス)にて2013年3月11日～13日(予定)の開催となります。みなさま、くれぐれも原稿締切りは守りましょう。

余談ですが、最終日、学生アルバイトの皆さんに解散指示が出た後に、会場設営で移動した机やイスの原状復帰を確認したところ、数や戻すべき教室のズレが発覚し、実行委員長、関東支部長も含め実行委員会メンバーで机やイスの物品ナンバーを確認して回ったのは未だに実行委員会の方々の間で語り草です。こんな話しを書いて良いのか分かりませんが、まあ「若手(若気)の至り」ということで...

### 目次:

【特集】	第46回日本水環境学会年会の参加報告	
	(岩崎 雄一)	1
	(吉田 征史)	1
【特集】	第6回世界水フォーラムの参加報告	
	(武田 智子)	2
【Japan-YWPイベント報告】	第2回総会兼セミナーの報告	2
	(松原 康一)	
【近況報告】	硝化脱窒グラニュール装置の開発	3
	(金井 佑樹)	
発信の重要性		3
	(渡辺 佑輔)	
【Water Resources】	“みず”に関するお薦めの情報	4
	(福島 寿和)	
	(佐野 翔一)	
	(田中 美奈子)	
【手紙 ～拝啓若手の君へ～】	国際的な方式を身につけよ	5
	(亀田 宏)	
【私の1日のスケジュール】		5
	(村山 雅美)	
Japan-YWP新運営体制のご紹介		6
Japan-YWPウェブサイトのリニューアル		6
今後の予定	(YWP活動予定, 他イベント情報)	6
入会方法と問い合わせ先		6
編集後記		6



写真2: クリタ賞 受賞者



写真3: ライオン賞 受賞者

## 【特集】第6回世界水フォーラムの参加報告

武田 智子(昭和環境システム株式会社)

Marseille!

革命と石鹸のまちで、世界最大の水イベントのボランティアスタッフとして働いてきた。

### ○きっかけ

1月12日、YWPメーリングリストに一通のメールが転送されてきた。“Water Forum” “travel/accommodation will be FULLY supported” (交通費・滞在費全額支給)の重要キーワードに私のパラボラアンテナが反応し、その日のうちに応募した。語学力や雑誌編集経験(土木学会誌)が評価されたのか、晴れて水フォーラムに記者として参加することになった。

### ○水情報洪水

世界17か国から集まった21人のYWP仲間で、水について語りつつ和気藹々と記事を書く毎日。記者として参加すると何でもネタに見え、たとえ地味なトピックでもどのように書か一生懸命考えるので理解度が向上する。

今回のフォーラムは“time for solutions”が副題で、具体的な実践事例を集める試みが随所で行われていた。また、ローカリゼーションの傾向も前面に押し出され、地域ごとの施策ディスカッションの場が多く設けられていた。聴講した中でもアフリカや中東のセッションは特に活発に意見が交わされていた。水資源が希少な地域では国家戦略と水の距離が近い。ストレートで熱い意見が飛び交う会議はまさにそこで歴史が動いている雰囲気、立ち会える幸運に肌がピリピリした。

情報過多で頭が常に満杯の状態だったが、得た情報で一番大事なのが人とのつながり。ひたすら話すことにより世界中の水パーソンとのネットワーク

を作ることができた。今後もパラボラアンテナを磨きつつ貪欲に国際水パーソン路線を走り続けたいと思う。

参照リンク:

World Water Forum Official Newsletter website  
[www.worldwaterforum6.org/en/news/newsletter/](http://www.worldwaterforum6.org/en/news/newsletter/)



写真1: 記者チーム集合写真



## 【Japan-YWPイベント報告】

### 第2回総会兼セミナーの報告

松原 康一(Japan-YWP戦略委員 株式会社日水コン)



写真1: 基調講演  
(日水コン・竹村氏)



写真2: 「お見合いパーティー形式」で  
ネットワーキングセッション

2011年12月17日、日本水道協会会議室にて、Japan-YWP第2回総会兼セミナーが開催されました。当日は、Japan-YWP運営委員からの活動報告と発表や交流を交えてのセミナーを行い、産・官・学から45名の方が参加されました。

基調講演の日水コン竹村氏からは、「将来の国内水道事業の目指すべき方向性と若手へのメッセージ」と題して、ご自身の技術者としてのご経験や、地球温暖化や渇水など日本の水道が抱えるリスクについて解説し、若手がどのような視点で水道事業と向き合うべきかについてご講演いただきました。

YWPメンバーからの発表は、東京設計事務所の中園氏より南スーダン・ジュバ市の水道事情について、土木研究所の日高平氏よりこれからの下水道研究として在外研究でのご経験を、横須賀市(神奈川県内広域企業団より出向)の矢口氏よりご自身の横須賀市への人事交流体験を、東京大学都市工学専攻特任研究

員の浜崎氏より水資源管理のガバナンスとして研究事例をそれぞれご紹介いただきました。

ネットワーキングセッションでは、「お見合いパーティー形式」という趣向で、短時間でできるだけ多くの参加者と交流をできるように3分ずつ席替えをして、自己紹介や意見交換をしました。

今回の総会兼セミナーでは、多くの参加者を得て、設立から約2年のJapan-YWPが少しずつ軌道に乗っていることを実感した場でした。2012年は、12月に予定されている第4回IWAアジア太平洋若手水専門家地域会議(AP-YWP)をはじめ、大きなイベントも予定されています。私自身、新しい運営委員として、みなさんと一緒にJapan-YWPをどんどん魅力的な場にしていければ嬉しいと思います。





## 【近況報告】

## 硝化脱窒グラニューール装置の開発

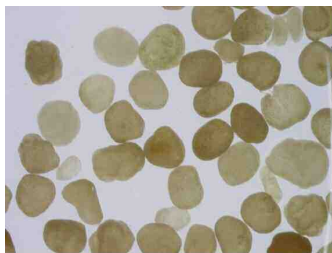


写真1: 硝化脱窒グラニューール



写真2: 通常の活性汚泥 (BAR: 500μm)

## ○ 好気グラニューールを用いた高速硝化脱窒

弊社では好気グラニューール汚泥を用いた高速窒素処理装置を開発し実用化しました。私も本件の開発に携わっておりますので、新規技術の開発業務について紹介します。

弊社の好気グラニューールの特徴を以下に挙げます。

好気グラニューール汚泥は高い沈降速度を持つためにリアクター内で汚泥を高濃度に保持することが可能であり、そのために従来の3~5倍の高速処理が可能となります。

従来、多くの研究で好気グラニューールの形成に成功したのはSBRと呼ばれる回分式の反応槽を用いたもので、一般的には実用化しづらいものでしたが、連続流入式で実用化しました。

## ○ 開発経過

まずは数十Lサイズのラボ実験機で水槽形状等の検討を行いました。当初、連続流入方式ではAUFB (Aerobic Upflow Fluidized Bed) でしかグラニューール形成は確認されていませんでしたが、通常の角型水槽でも可能であることが確認できました。

## 金井 佑樹(オルガノ 株式会社)



次に数百Lサイズのパイロット実験機を作成し、装置の大型化による操作条件の変化、処理能力やグラニューール形成の可否などを確かめました。

さらに実用化のためには、実際の排水における処理能力を模擬排水での結果と比較する必要があります。そこで、実排水を用いた実証実験を実施しました。産業排水処理現場では良くあることなのですが、流入アンモニア濃度に想定以上の大きな変動(2倍以上)があったにもかかわらず安定した処理能力を発揮し、好気グラニューールの形成にも成功しました。こうして段階的なプロセスを経て実用化にこぎつけています。

各ステップは概ね順調に進みましたが、生物処理ゆえに評価に時間がかかります。今も追跡調査で月に2~4回程度様子を見に行っていますが、微生物とはいえこれだけ手をかけてやると情が移り、かわいらしくさえ感じられてきます。

## 発信の重要性

## ○ 第4回IWAアジア太平洋地域会議でのポスター発表(2011年10月)

会議では、「A forecast of renewal demands and an analysis of financial situation of water supply entities in Japan - urgent needs for appropriate asset and utility management.」と題したポスター発表を行いました(弊社 松原・安達ほかと共同発表)。発表は、対象地域における2050年までの更新需要と水需要予測を踏まえて財政収支の推計を行い、施設の現況機能を維持する条件であっても、小規模な事業体ほど財政的に厳しい状況を迎えることを定量的に示したものです。将来の日本の水道事業を考えていく中で避けては通れない課題であり、多数の方とディスカッションをさせていただきました。余談ですが、後日、業界誌「Global Water Intelligence」の10月号に「Japan's infrastructure spending dilemma」として掲載されました。

## ○ 出身大学での出前講義~コンサル業務と東京の暮らし~(2012年2月)

日常の業務とは打って変わり、出身大学である熊本大学工学部社会環境工学科の学生を対象に、出前講義と題した発表を行いました。本活動は、所属する大学同窓会組織の活動の一環として初めての試みで、

## 渡辺 佑輔(株式会社 日水コン)



私を含めた“東京在住”の“若手OB技術者”(3名:ゼネコン・コンサル・メーカー)の発表を主とすることに特色があります。若手目線を大事にすることを念頭に、コンサルとは?から講義を始め、上下水道に特化した弊社の業務内容や今後の展望に加えて、大学での学習内容が業務にどう活かされているか?などを発表しました。発表後には、就職活動状況や土木業界、上京後の相談事に渡るまで多数の質問を受け、講演終了時間を超過しても話が尽きない盛況でした。年が近いとはいえ、学生の生の声を聞くことで私自身も色々と考えさせられることが多く、貴重な経験となりました。

“つながり・絆”が希薄といわれる昨今ですが、幸運にも本学科は昔から学生間の“縦・横のつながり”が強いことが本活動にもつながったと思います。“大学卒業後は縁なし”ではなく、双方に有意義な方法を“若手社会人からも発信”していくことの重要性を強く感じました。

## 追伸

2012年4月より日本水道協会雑誌抄録委員に就任いたしました。よろしくお願いいたします。

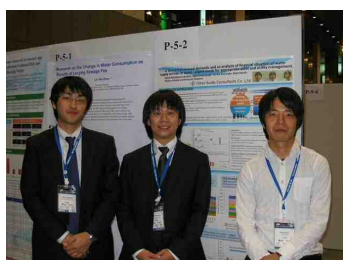
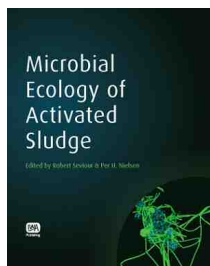
写真1: ポスター発表  
(第4回IWAアジア太平洋地域会議)  
(左から、渡辺、松原、安達)

写真2: 出身大学での出前講義

## 【Water Resources】“みず”に関するお薦めの情報

### 「Microbial Ecology of Activated Sludge」のご紹介



活性汚泥法に関わる微生物、およびその解析手法を学べる良書「Microbial Ecology of Activated Sludge」(Robert Seviour & Per H. Nielsen編著)を紹介させていただきます。私が昨年まで勤務した国立成功大学(台湾)で、微生物学的視点から活性汚泥法の研究を始める学生に、輪読形式で読んでもらいました。基礎知識から最新の研究事例までがまとまっており、楽しく読み進めることが出来ました。本書の前半では、活性汚泥中の微生物群集の概論に始まり、パルキング、生物発泡、生物学的窒素およびリン除去法に関わる微生物が紹介されています。後半では、微生物を解析する手法として、PCRやクローニングといった古典的なもの

### 福島 寿和(北海道大学)



だけでなく、MicroarrayやStable Isotope Probingなどの新しい手法まで紹介されています。目的に応じてどのような手法を使うべきか、学生たちに考え、理解させるのにとっても役立ちました。

なお、学生への指導として、本書に加えて「At the Bench: A Laboratory Navigator」(Kathy Barker著)も輪読形式で勉強してもらいました。こちらもこれから研究室生活を始める学生さんには是非進めたい良書です。

### 「英国ロンドンにおけるCSO対策 – テムズトンネル Thames Tunnel –」のご紹介

#### 佐野 翔一(みずほ情報総研)



合流式下水道排水区において衛生面・環境面の影響が懸念される“雨天時越流水(CSO)”に対する海外の対策事例として、英国ロンドンのテムズトンネルプロジェクトを紹介いたします。

本プロジェクトは、下水の貯留及び輸送機能を担う全長34kmのトンネルをロンドンに建設するものであり、英国とロンドンにおいて上下水道事業を実施している民間企業のテムズウォーター社の協力のもと進められています。

本プロジェクトの背景には、2000年から2005年にかけて行われた調査“TTSS (Thames Tideway Strategic Study)”があります。本調査においてCSOの対策案について、溶存酸素への影響、健康リスク、コスト等、様々な側面から検討が行

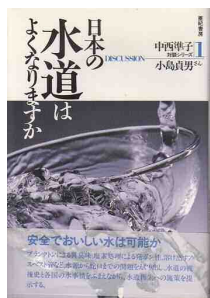
われ、その結果、テムズトンネルの建設が最適な案であると特定されています。

CSOという日本の大都市も抱える共通の課題に対する官民連携での取り組み、そして方策決定のプロセスが興味深く感じ、今回ご紹介いたしました。

- テムズトンネル: <http://www.thamestunnelconsultation.co.uk/>
- 英国の管轄省庁 DEFRA: <http://www.defra.gov.uk/environment/quality/water/sewage/overflows/>

### 「日本の水道はよくなりますか(中西準子・対談シリーズ 1)」のご紹介

#### 田中 美奈子(千葉県水道局)



この本が発行されたのは1988年なので、YWPの方々にとっては「近現代史」みたいなものでしょうか。戦争、高度経済成長、上下水道の普及、水源汚染、といった出来事を背景に水問題に取り組んだ先生方の証言が、対談形式で書かれています。

pH、鉛、マンガン、トリハロメタンなど、普段なら「数字の羅列」と捉えてしまいがちな水質基準ですが、ここでは、歴史背景を知ることによって「そんな経緯があったのか」と興味が湧く内容となっています。この本で取り上げられた水質基準が現在どうなっているかを知ると、さらに興味深く読むことができます。

そしてこの本では、浄水技術の変遷についても知ることが

できます。これは私自身の経験ですが、浄水場は建設してから何十年も使い続け、その中で更新や増設を繰り返すため、浄水場には古い技術と新しい技術が存在します(なかには「これはどうかなあ」と思うものもあったり…)。この本を読んだ上で浄水処理の現場を見ると、浄水技術は様々な過程を経て変化しており、そこには先人のトライ&エラーが反映されているのだ、ということが分かります。また、それと同時に、現在普及している技術が最良・絶対ではない、ということも感じさせられます。



## 【手紙 ～拝啓若手の君へ～】

国際的な方式を身につけよ

亀田 宏(株式会社 東京設計事務所 代表取締役社長)



<ご略歴>

- 1964年 京都大学工学研究科 修士課程修了
- 1964年 東京都水道局
- 1971年 東京都下水道局
- 1987年～ 東京設計事務所
- 2007年～ (社)日本水道工業連合会 副会長
- 2010年～ (社)全国上下水道コンサルタント協会 副会長

私どもの会社は、1959年の創業当初から海外業務を含め、上下水道を中心とした水インフラの構築を得意とするコンサルタント会社です。海外業務と国内業務では、それぞれ担当する社員は分かれていて、両者に通用する社員はごく少数です。両者に習熟することを難しくしているのは、言語の壁以上に仕事の進め方が海外と国内では異なるためです。

明治から終戦までは、インフラ施設の計画、設計、施工を役所が直接担当するのが普通でした。終戦後、まず上水道の整備が、次いで下水道の普及が急速に進められてきました。この急速な普及のため、施工はゼネコンなど請負に、計画や設計もコンサルタント会社に委託されるようになりました。

多額の資金が集中的に投入され、上下水道の整備を急ぐため効率化が優先され、設計指針など多くの基準が国を挙げて整えられました。この結果よい施設を早急に整備したものの、個々の技術者の創意工夫が生き生きしないわが国独自の事業執行形態が形成されたと思います。

海外のコンサルタント業務では、技術者は設計から施工業

者の選定や施工監理まで一連の業務に関わり、設計に採用した技術の責任は自身で負わなければなりません。

このように海外と国内では仕事の進め方が異なるのですが、経済大国であるわが国は、世界から国際化が求められており、建設業界も国際化は必須です。しかし国内のシステムを世界標準に変えるのはかなりの日時を要するものと思われます。

そこでYoung Water Professional の皆さん、国内が国際的な方式に変わるのを待っている時間はありません。国際化が必須である以上、大変でも世界の方式を勉強して下さい。

手始めに国内でも取得可能になった米国のProfessional Engineer の資格に挑戦するのはいかがでしょうか。わが国の技術士の資格は、医師や建築士あるいはこのPEとは異なり、専門とする業務に携わる権利を与えるものではありません。外国の資格を取得した皆さんが大いに活躍することは、わが国を国際化するドライビングフォースになると思います。

## 【私の1日のスケジュール】

### 【自己紹介】

趣味は、フラメンコ、旅行、天体観測。週末や長期休暇は、もっぱら趣味に費やしています。会社での今期の目標は癒し系。共用スペースのデスク上でトマトを育て始めました。小腹が減った際に食べられる様に、可愛がって育てています。



トマトちゃん!

### 【1日の流れ】

- 7:00～7:30 起床・出社準備：自転車です20分という快適通勤のため、起きるのは遅めです。
- 9:00 出社：メールのチェックや前日の実験結果の確認・考察、次に行う実験の条件確認・準備などを行います。
- 12:00 昼食：食堂がないため、提携している業者のお弁当を食べます。よく言えばスタミナ満点、言い換えると高カロリーなおかずなので、美容と健康のために量や食材を選びながら食します。
- 12:30 筍掘り：春限定イベントですが、会社の敷地内にある竹林で筍掘りに精を出します。私は見つけるだけでも一苦労ですが、名人レベルになると30分程度の時間に籠が一杯になるほど収穫します。周りの人からは「どっちが本業？」と突っ込まれるほどです。
- 13:00 午後の業務開始：泥だらけになりながらの筍収穫でリフレッシュし、午後の業務に向かいます。基本的に実験がメインなので、実験室とデスクとをウロウロしています。
- 18:00/19:00 業務終了

村山 雅美(オルガノ 株式会社)



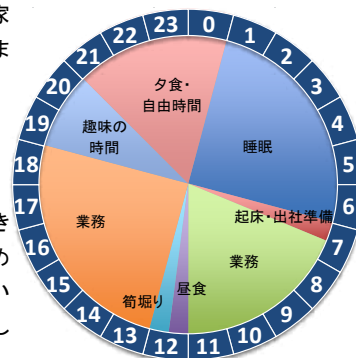
19:00 趣味の時間：毎週木曜日は、フラメンコレッスンに通っています。リズム感が無いので、毎回レッスンについていくので必死です。習い始めて1年が経ち、カッチンコッチンだった体がちょっとずつ柔らかくなりました。また日々の姿勢も意識する様になったためか、肩凝りが全くなくなりました！！

21:00 夕食・自由時間：22時前に食事を取るように心がけてはいるものの、誘惑に負ける日々…。甘いものが家にあると、我慢できず食べてしまいます。

25:00 就寝

### 【ひとこと】

担当業務とは少し分野が違うため、なかなかYWPのイベントにも参加できずにおりましたが、自分の知見を広めるためにも今後は積極的に動いていければと思っています。どうぞ、宜しくお願い致します。



## Japan-YWP新運営体制のご紹介

既にご存知かと思いますが、Japan-YWPの第2期運営体制についてお知らせいたします。

第2回Japan-YWP総会兼セミナーでの決定に基づき、運営委員会で協議した結果、以下の体制にて2012～2013年度の運営を行うことになりました。ご理解、ご協力のほどよろしくお願いたします。

<第2期運営体制(2012～2013)> (黒字:再任, 赤字:新任)

代表: 春日郁朗(東京大学)

副代表: 佐藤久(北海道大学)

総務: 真砂佳史(東北大学), 二宗史憲(日本水道協会)

戦略: 岸田直裕(国立保健医療科学院), 寺田昭彦(東京農工大学),  
小野寺崇(国立環境研究所), 松原康一(日水コン),  
森谷直子(環境省)

広報: 中園隼人(東京設計事務所), 山本敦史(関西大学),  
柿本貴志(埼玉県環境科学国際センター),  
山下喬子(日本下水道事業団), 山村寛(中央大学)

AP-YWP担当:

佐藤久(実行委員長), 金田一智規(広島大学),

橋本崇史(メタウォーター), 本多了(金沢大学),

真名垣聡(横浜国立大学), 吉田征史(日本大学),

春日郁朗(東京大学)

(事業体からの参画については別途検討中です。)

## Japan-YWPウェブサイトのリニューアル

Japan-YWPウェブサイトが4月からリニューアルしました(<http://www.japan-ywp.net/>)。

ウェブサイトのコンテンツを独自に用意し、更新しております。迅速に情報を提供・共有し、Japan-YWP会員間の交流の一助になればと思っておりますので、是非チェックして下さい。

IWA国内委員会のウェブサイト(<http://www.iwa-jnc.jp/ywp.html>)には、Japan-YWPのトップページを残しておりますので、そちらからJapan-YWPウェブサイトへアクセスすることもできます。



Japan-YWPウェブサイト

## 今後の予定(YWP活動予定)

(1) 第1回Japan-YWP-下水道研究発表会ジョイントワークショップ  
2012年7月24日(火)に神戸で、第1回Japan-YWP-下水道研究発表会ジョイントワークショップ「(仮)下水道に関わる産官学の若手交流」を開催致します。  
日程:2012年7月24日17:30～19:00 場所:神戸国際会議場5階502号室  
使用言語:日本語

(2) 第9回水道技術国際シンポジウムJapan-YWP企画セッション  
2012年11月21日(水)に横浜で、Japan-YWP企画セッション「Colorful Young Water Professionals in Japan」を開催致します。  
日程:2012年11月21日 場所:パシフィコ横浜  
使用言語:英語

(3) 第4回IWAアジア太平洋 若手水専門地域会議(AP-YWP)  
2012年12月7日(金)～10日(月)に東京で、第4回AP-YWPを開催致します。  
(アブストラクト提出期限:7月2日)  
日程:2012年12月7～10日 場所:東京(日本科学未来館)  
使用言語:英語  
後援:日本水環境学会, 日本水道協会, 東京都水道局, 日本下水道協会, 東京都下水道局

以下のセミナーに関しては、日程が未定です。詳細が決まりましたら、適宜メーリングリストでお知らせ致します。

- ・イブニングセミナー(東京/日本語)
- ・総会兼セミナー(東京/日本語)

## 入会方法と問い合わせ先

### ■入会方法

随時、会員募集中です。会員要件は、大学・研究機関、官公庁、上水道・下水道事業体、民間企業などに所属する水関連の若手・学生(原則35歳以下)とし、専門内容やIWA会員であることの有無は問いません。また、年会費等は不要です。入会希望の方は、①所属、②氏名、③生年月日、④E-mailアドレス、⑤専門分野を明記の上、以下のアドレスまでお気軽にお申込



みください。

宛先 janyanywp@gmail.com (担当:真砂佳史, 二宗史憲)

### ■お問合せ

春日郁朗助教(代表, 東京大学大学院) [kasuga@env.t.u-tokyo.ac.jp](mailto:kasuga@env.t.u-tokyo.ac.jp)

佐藤久准教授(副代表, 北海道大学大学院) [satoh@eng.hokudai.ac.jp](mailto:satoh@eng.hokudai.ac.jp)

## 編集後記

Japan-YWPが設立されて早2年経ち、Japan-YWPの運営体制も第2期に入りました。装いも新たに、今年開催の第4回IWAアジア太平洋 若手水専門地域会議、多くの活動を予定しておりますので、引き続きどうぞ宜しくお願い致します。加えて、前述しましたように、4月からウェブサイトのコンテンツを独自に用意しております(<http://www.japan-ywp.net/>)。ウェブサ

イトに関して、会員の皆さんからのご意見・ご要望等、お待ちしております。最後に、今号を編集するにあたり、原稿や写真をお寄せいただきました皆様、ご協力頂き、誠にありがとうございました。

(Japan-YWP広報委員)